

ダカールラリーにみるアフリカ情報

モータースポーツジャーナリスト 古賀 敬介

■ダカールラリーとは

「パリダカ」という名前で親しまれている世界一苛酷なラリーは、「ダカールラリー」が正規の大会名称である。1979年にフランス人ライダーのティエリー・サビーヌが創始、フランスのパリをスタートしてセネガルのダカールでフィニッシュするルートが基本の形である。かつてのフランス植民地であり、言葉など何かと利便性が高いことが、セネガルが目的地に選ばれた理由のひとつだ。パリ～ダカールラリーを略してパリダカと呼ぶのは日本的だが、現在のダカールラリーはパリもダカールもコースに含まれていない。ヨーロッパとアフリカを結ぶルートは2007年が最後で、2009年からは舞台を南米へと移しアルゼンチンとチリの2か国をまたぐラリーに変わった。そういう意味では、ダカールラリーという正式名称もすでに内容を正しく示してはいない。

ダカールラリーは1979年の初開催以降、ダイナミックな砂漠のラリーとしてヨーロッパを中心に世界中で人気を博してきた。総走行距離数千kmにもおよぶコー



スはその大部分が荒れ果てた土漠や砂漠で、他のラリーよりも冒険的な意味合いが強い。四輪駆動車で普通に走ることさえ難しい道なき道を全開で走り続けるのは至難の業で、当然のようにアクシデントが頻発し毎年のように死傷者が出る。それでもラリーが続いてきたのはヨーロッパ的個人主義が根底にあるからで、危険なラリーという評判はむしろ参加者を増やす材料となっている。

■アフリカから南米へ

そんなダカールラリーが大きく方向転換したのは2009年大会からであった。ラリーのスピリットともいえるアフリカの地を離れ、南米大陸に舞台を移したのは、西アフリカおよび北アフリカ諸国の急激な治安悪化が原因である。その前年の2008年、ポルトガルの首都リスボンからダカールへと向かうルートが予定されていた第30回大会は、スタート前日の1月4日に急きょラリー全日程の中止が決まった。通過国のひとつであるモリタニアでのテロ活動が活発化し、ラリー参加者の安全を保障できないと主催者が判断したためだ。

ダカールラリーの長い歴史の中で、政情不安や治安悪化が原因でラリーが中止となったのは初めてのことであった。主催者が被った金銭的な被害はばく大で、80億円以上ともいわれている。参加者やラリー通過国



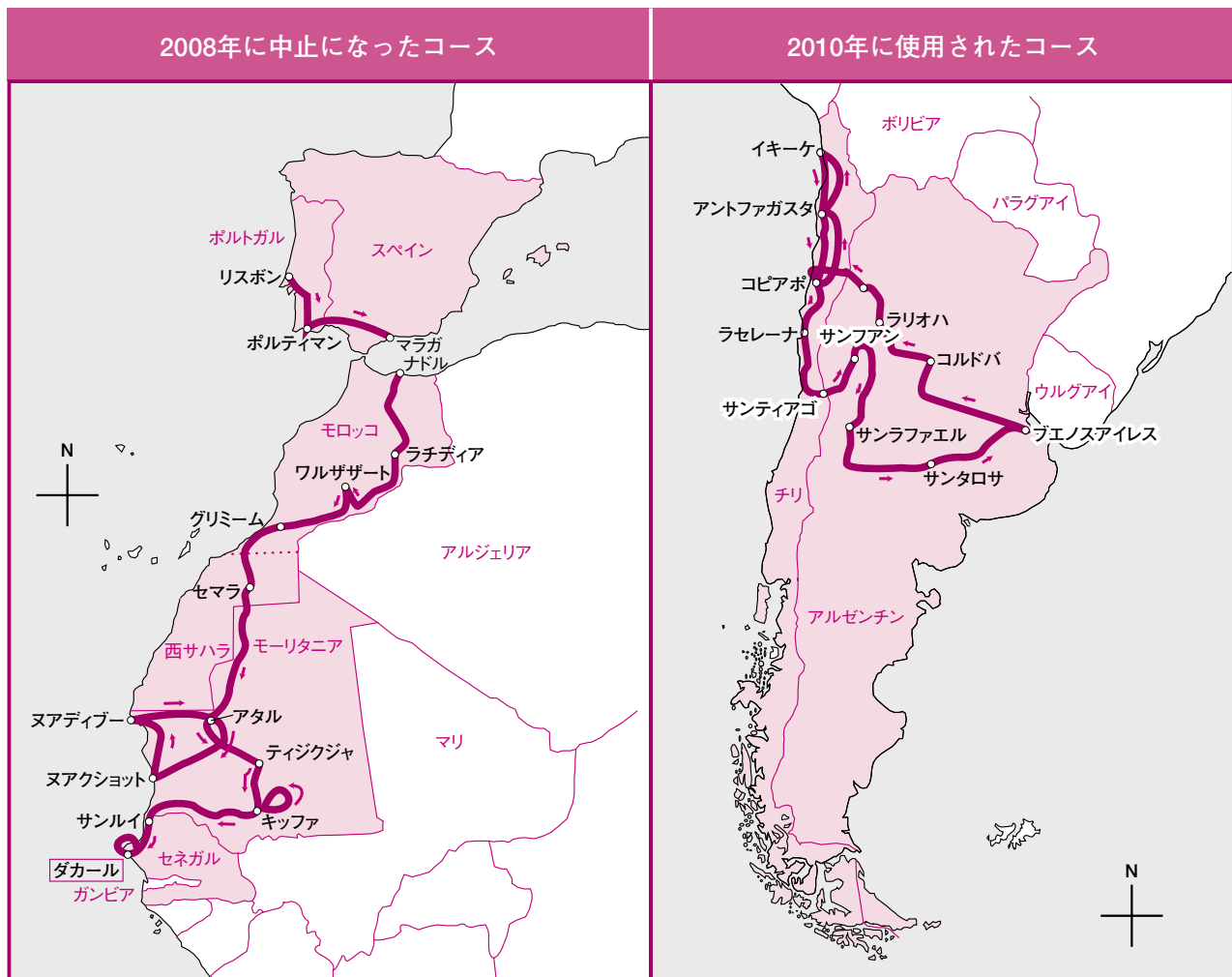
『新詳高等地図 初訂版』 p.37

が負ったマイナスも含めると、全体での被害額はさらに大きく膨れ上がる。大人数が移動するラリーを迎えることでアフリカ各国の通過都市は経済活動が盛んになる。また、主催者および参加者による農地開発や井戸掘りなど地元支援活動も長年行われてきた。そして、主催者から支払われる施設使用料や補助金は各国政府にとっては重要な財源で、それゆえモーリタニアなど各国政府は最後の最後まで開催実行を切望し軍隊や警察を使つての警備を約束した。主催者も何とかラリーを開催しようと試みたのだが、最終的にはフランス政府からの強い圧力がかかり開催を断念したといわれている。それゆえ、開催中止の最終決定がスタート前日というギリギリのタイミングまで遅れたのだ。これまで競技で死傷者が何人出ようともダカールラリーは続いてきた。それでもダカールラリーはアフリカの大地にこだわり続けてきたが、直前に大会中止という最悪の事態は影響の大きさを考えると二度と許されない。

主催者はしかたなく、アフリカと比べればテロの危険性ははるかに少ない南米に場を移すことにしたのである。

■ダカールラリーとアフリカの治安の悪化

ダカールラリーがテロ攻撃の標的となったのは2008年が最初ではない。1991年に参加者のフランス人がマリで銃撃され死亡したのをはじめ、1996年には参加者を支援する三菱のトラックがマリとモーリタニアの国境付近で何者かから銃弾を受けた。幸いにもこの件で死傷者は出なかったが、シトロエンのサポートトラックがモロッコでコース外の地雷を踏み1人が命を落とすという痛ましい事件が起こった。また、2000年にはニジェールで反政府ゲリラがラリーを襲撃するという情報が入り、主催者はニジェールを陸路で通過せずマリからリビアまで全参加者および車輻を大型輸送機で



ヨーロッパを発ちセネガルのダカールでゴールというのがかつての基本ルート。アルジェリア、マリに続きモーリタニアも通れなくなったことでダカールへの道は閉ざされた。2009年からは右図のようにアルゼンチン、チリを舞台とする南米大会に姿を変えた。



空輸するという前代未聞のできごとがあった。2004年には三菱の増岡浩選手がモーリタニアで地元の武装強盗団に銃を向けられ、不正な通行料を要求される事件が発生。また、2007年大会ではマリ国内でテロの危険性が高まったことでラリー中に急きょコースを大幅変更。マリを通らぬ代替ルートが採用された。

以上が代表的な例であるが、この他にも小さな事件は山ほど起こっている。それでもダカールラリーは開催を重ねてきたわけだが、近年はアフリカ全体の治安レベルが急激に悪化。中止となった2008年大会の前年末にはモーリタニアでフランス人観光客4人が殺害され、それとは別にモーリタニア軍の兵士が武装集団に襲撃されて死亡するという事件が起こった。犯行はいずれもアルカイダ系のイスラーム過激派によるものと、犯人の一部を捕えたモーリタニア政府は発表した。これまでのテロ事件と大きく異なるのはアルカイダの流れをくむ急進的なテロ集団が事件に関与していたことで、もしもラリーが襲撃された場合は多数の死傷者が出るだけでなく、人質がとられる可能性もあった。政治的リスクが極めて高いということで、フランス政府は主催者に対し半強制的にラリーの開催中止を求めたのである。

ヨーロッパからダカールへと向かうルートは限られている。ヨーロッパからアフリカまではスペイン南端の港から船に乗ることになるが、上陸地点として現実的なのは北アフリカのモロッコ、アルジェリア、チュニジア、リビアといった国々である。ここでネックとなるのはアルジェリアの治安がひじょうによくないことで、ダカールラリーもここしばらくはアルジェリア

国内を通らないルートを設定してきた。本来ならアルジェリアからその南に位置するニジェールまではラリーに最適なすばらしい砂漠地帯が広がっているのだが、北アフリカ中央部を南下するルートは治安が悪い。そこで近年はモロッコに上陸し、西サハラを通過してモーリタニア、マリ、ブルキナファソといった国々を走りセネガルのダカールへと至る西側ルートが主流となっていた。

しかし、マリにアルジェリアからの武装集団が流れ込み、さらには比較的治安が安定していたモーリタニアまでもがテロ攻撃の射程圏内に入ったことでルートの策定作業は手詰まりともいえるほど厳しくなった。もはや、テロの危険性を完全に排してダカールへと向かうことは不可能に近い。南米大陸へのシフトは、いわば必然だったといえよう。

■なぜ、テロ攻撃の標的に

では、なぜダカールラリーはテロの標的となるのか？ それは西洋の文明・宗教の象徴であり、旧植民地支配を連想させるものであり、さらには報道効果が大きいからだ。ダカールラリーのステージとなる北および西アフリカの国々は、そのほとんどがフランスの旧植民地である。公用語はフランス語、通貨は植民地という単語を源流にもつCFAフラン。キリスト教などの宗教や西洋的文明・文化を長年にわたり強要されてきた。そのひずみがフランスの影響力の低下に伴い噴出してきたといえ、貧困問題を礎とする宗教的な反発力は年々勢いを増している。テロ集団にとって、世界的に名高いダカールラリーの襲撃はラリーそれ自体のせん滅が目的ではない。自分たちの活動と力をメディアの力を使って世界中にアピールすることが最大の狙いである。実際、彼らはダカールラリーを中止に追い込み、組織の名前を世に知らしめることに成功した。

2008年の大会中止後、主催者は「テロには屈しない。我々は必ずアフリカへ戻る」と宣言したが、2011年もまたダカールラリーはアルゼンチン～チリ間で行われることが決まった。今後、アフリカでイスラーム過激派の活動が急速に縮小する可能性は極めて低く、ダカールラリーが再びダカールに進路をとる日はまだまだ先のことになるだろう。